

## KASPAROV 群 について

阪大基礎工 市原 亮 ( Ryo Ichihara )

0. 準備と記号 G.G. Kasparov [4] によって、 $C^*$ -環の代数的  $K$  理論と  $C^*$ -環の拡大の理論の統一である両変関手の "KK-Group" が定義された。ここで  $C^*$ -環の拡大とは Brown-Douglas-Fillmore [1] によって与えられた可換  $C^*$ -環  $C(X)$  に対して短完全列  $0 \rightarrow K \rightarrow D \rightarrow C(X) \rightarrow 0$  の全体の同値類から得られる  $K$ -homology から発展して、一般に可分  $C^*$ -環に対しても同様に、短完全列の全体から得られる理論である。すなわち、2つの  $C^*$ -環  $A, B$  に対して、 $KK^*(A, B)$  という添字付きの可換群が対応して、 $A$  に対して反変、 $B$  に対して共変の関手である。 $X$  を可分局所コンパクト空間のとき、

$$KK^*(\mathbb{C}, C_0(X)) \cong K^*(X) \quad \text{コンパクト台 } K\text{-理論}$$

$$KK^*(C_0(X), \mathbb{C}) \cong \mathcal{K}_*(X) \quad \text{一般ステーンロッドホモロジー}$$

更に、 $KK^*(\mathbb{C}, B) \cong K_*(B)$  代数的  $K$ -理論

$$KK^*(A, \mathbb{C}) \cong \text{Ext}^*(A) \quad \text{拡大群, if } A: \text{核型}$$

ここで、何故  $C^*$ -環を用いるのか、Banach 環を用いないのかという疑問が湧ぶが、次の例を見ることにより理解できる。実数  $\mathbb{R}$  を可換位相群と見てその  $L^1$  代数（積はコンボリューション）はその  $C^*$ -ノルム閉包  $C_0(\widehat{\mathbb{R}}) \cong C_0(\mathbb{R})$  の稠密部分環で、関数計算の閉性についての障害があって、代表元の取り方の計算に一考必要になる。 $C^*$ -環はこれに用いていることから、非常に便利である。

最初に、KK-理論の定義を述べるが、その考え方の中心は Fredholm 作用素の理論とその拡張である。このことを意識して進んで行く。

記号

◦  $A, B, D, E$  : 可分  $C^*$ -環

$K$  : 可算無限次元 Hilbert 空間上のコンパクト作用素全体から成る  $C^*$ -環

◦  $C_{p,q}$  : クリフォード環 /  $\mathbb{C}$ 、符号が  $p, q$ .

更に、 $C_{p,q}$  は外積代数  $\wedge C^{p+q}$  上に表現を持つ有限次元  $C^*$ -環で

$$C_{p,q} \cong \begin{cases} M_{2^{\frac{p+q}{2}}} & p+q : \text{even} \\ M_{2^{\frac{p+q-1}{2}}} \otimes \mathbb{C}^2 & p+q : \text{odd} \end{cases}$$

のような構造を持っている。

$C_{p,q}$  の符号  $C_{p,q}$  は  $C^{p+q}$  を部分線形空間として持ち  $C^{p+q}$  の基底が  $C_{p,q}$  の生成元となる。これらの生成元の偶数個の積の和として表される元  $x$  を偶といい、 $\deg x = 0$ 、奇数個の積の和として表される元  $y$  を奇といい、 $\deg y = 1$  と定める。

◦  $M(B)$ :  $C^*$  環  $B$  の multiplier 環を表す。

ここでこの環は次の性質を持つ。もし、 $C^*$  環  $B$  があるヒルベルト空間  $\mathcal{H}$  上に忠実に表現されているとき、すなわち、 $B \hookrightarrow \mathcal{L}(\mathcal{H})$  のとき、 $M(B) = \{ x \in \mathcal{L}(\mathcal{H}) \mid xB, Bx \subset B \}$ 。別の言葉で言えば、 $M(B)$  は  $B$  の  $\mathcal{L}(\mathcal{H})$  での idealizer である。上で注意すべき事は、表現空間が異なっても  $M(B)$  は同型である。

◦  $B(X)$ : 局所コンパクト-ハウスドルフ空間  $X$  上の  $C^*$  環  $B$  値を持ち無限遠方で消える連続関数全体の成す  $C^*$  環、

特に  $I$  を単位区間とすると  $B(I)$  など。

## 1 KK 群の定義

$p, q \in \mathbb{N} \cup \{0\}$  添字に対して、 $K_{p,q}(A, B)$  を定義しよう。

まず、構成元全体は

$$\mathcal{E}_{p,q}(A,B) = \left\{ (\varphi, F); \varphi: A \otimes C_{p+1,q} \rightarrow M(B \otimes K) \text{ }^* \text{-homo}, F \in M(B \otimes K) \right\} \\ \text{with } (*)$$

$$(*) \begin{cases} (1) \varphi(a)F \sim (-1)^{\text{deg } a} F \varphi(a) \\ (2) (F^2 - 1) \varphi(a) \sim 0 \\ (3) (F - F^*) \varphi(a) \sim 0 \end{cases} \quad \forall a \in A \otimes C_{p+1,q}$$

(ここで  $T_1 \sim T_2 \Leftrightarrow T_1 \in T_2 + B \otimes K$  を表わす。)

次に、0元となるもの全体 (degenerate element) は、

$$\mathcal{D}_{p,q}(A,B) = \left\{ (\varphi, F); (\varphi, F) \in \mathcal{E}_{p,q}(A,B) \text{ with } (*). \right\}$$

$$(*)_0 \begin{cases} (1)_0. \varphi(a)F = (-1)^{\text{deg } a} F \varphi(a). \\ (2)_0. (F^2 - 1) \varphi(a) = 0 \\ (3)_0. (F - F^*) \varphi(a) = 0 \end{cases} \quad \forall a \in A \otimes C_{p+1,q}$$

ホモトピー-同値

$(\varphi_0, F_0) \equiv (\varphi_1, F_1)$ ; ホモトピー-同値

$$\stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow} \exists (\{\varphi_t\}, \{F_t\}) \in \mathcal{E}_{p,q}(A, B([0,1])) \quad t \in [0,1]$$

$t=0,1$  のとき、それぞれ  $(\varphi_0, F_0), (\varphi_1, F_1)$  と一致してゐる。

$$\overline{\mathcal{E}}_{p,q} = \mathcal{E}_{p,q} / \equiv, \quad \overline{\mathcal{D}}_{p,q} = \mathcal{D}_{p,q} / \equiv \quad (\mathcal{E}_{p,q} \text{ 内での } \mathcal{D}_{p,q} \text{ の同値類})$$

和

$$[(\varphi_1, F_1)] + [(\varphi_2, F_2)] \stackrel{\text{def}}{=} [(\varphi_1 \oplus \varphi_2, F_1 \oplus F_2)] \quad [ ] \text{ は同値類}$$

well-defined は  $B \otimes K \oplus B \otimes K \subset B \otimes K \otimes M_2$  によりゐる。

この  $K$  の性質より和が定義できる。

$$K_{p,q} K(A,B) \stackrel{\text{def}}{=} \overline{\mathcal{E}}_{p,q}(A,B) / \overline{\mathcal{D}}_{p,q}(A,B).$$

定理 1  $K_{p,q} K(A,B)$  は可換群である。

$\therefore (\varphi, F)$  に対し

$$(\overline{\varphi})(a) = (-1)^{\text{deg } a} \varphi(a) \quad \forall a \in A \otimes C_{p+1,q}$$

$\overline{\varphi}$  も  $*$ -homo である。

$$(\varphi, F) + (\overline{\varphi}, -F) = (\varphi \oplus \overline{\varphi}, F \oplus (-F)) \in \overline{\mathcal{D}}_{p,q}$$

実際  $\begin{pmatrix} F & \\ & -F \end{pmatrix} \begin{pmatrix} & 1 \\ 1 & \end{pmatrix}$  by ホルタヒ  $F_\theta = \begin{pmatrix} F \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -F \cos \theta \end{pmatrix}$

$$\varphi_\theta = \varphi \oplus \overline{\varphi} \quad \text{とするとき}$$

$$1) \varphi_\theta(a) F_\theta - (-1)^{\text{deg } a} F_\theta \varphi_\theta(a)$$

$$\stackrel{\text{def}}{=} [\varphi_\theta(a), F_\theta] \quad (\text{general commutator})$$

$$= \begin{pmatrix} [\varphi_\theta(a), F] \cos \theta & 0 \\ 0 & [\varphi_\theta(a), F] \cos \theta \end{pmatrix}$$

$$2) F_\theta^2 - 1 = \begin{pmatrix} (F^2 - 1) \cos^2 \theta & 0 \\ 0 & (F^2 - 1) \cos^2 \theta \end{pmatrix}$$

$$3) F_\theta - F_\theta^* = \begin{pmatrix} (F - F^*) \cos \theta & 0 \\ 0 & -(F - F^*) \cos \theta \end{pmatrix}$$

明らか  $(\varphi_{\frac{\pi}{2}}, F_{\frac{\pi}{2}}) \in \overline{\mathcal{D}}_{p,q}$ .

g. e. d.

定理 2 (stable 同値)  $H$ : 可分ヒルベルト空間

$$KK(A \otimes K(H), B) \cong KK(A, B \otimes K(H)) \cong KK(A, B)$$

(1) 第 2 の同型は  $\{B \otimes K(H)\} \otimes K \cong B \otimes K$

第 1 の同型は  $K(H)$  の 1 次元射影子の一つを  $P$  とするとき

$$\varphi|_{A \otimes P} \text{ で 類は決まる。} \quad \text{g.e.d.}$$

定理 3 (形式的 Bott 周期性)

$$K_{p,q} K(A, B) \cong K_{p-q} K(A, B) \quad p-q \text{ の mod } 2 \text{ で同型が従う。}$$

(1) 定理 2 と クリフォード環の構造定理より従う。 g.e.d.

注意  $KK$ -群の代表元として、(1), (2), (3) をみたすものは、理論上考えた方がつごうかよいが、また、応用面でもそのような例がでてくるが、計算のつごう上少し条件を強くした形で代表元を取るとよい。

$A \ni 1$  のとき、(2), (3), (2)<sub>0</sub>, (3)<sub>0</sub> の条件は次のような (2)'<sub>0</sub>, (3)'<sub>0</sub> と見ることが出来る。

$$(2)' (F^2 - 1) \varphi(1) \sim 0 \quad (3)' (F - F^*) \varphi(1) \sim 0$$

$$(2)'_0 (F^2 - 1) \varphi(1) = 0 \quad (3)'_0 (F - F^*) \varphi(1) = 0$$

Connes [3] によると、 $\mathcal{E}_{p,q} \ni (\varphi, F)$  に対して  $(\varphi', F') \in \mathcal{E}_{p,q}$  があって、(1), (2)<sub>0</sub>, (3)<sub>0</sub> をみたし、 $[(\varphi, F)] = [(\varphi', F')]$  となる。そして、もう少し強いことかいて、 $F$  を self adjoint ユニタリ

に取れる。つまり、 $[\varphi(a), F] \sim 0$  となる self-adjoint unitary  $F$  と見ることが出来る。ところが (1) を (1)<sub>0</sub> にすることが大変難しい。

通常、KK-理論ではどういふ代表元をあつかうのかというと、定理より小まゝ  $p, q$  について考察してみよう。

$$p = q = 0 \text{ のとき } \quad C_{1,0} = \mathbb{C} \oplus \mathbb{C}e_0 \quad (e_0^2 = 1, e_0^* = e_0)$$

$$\varphi(e_0) = P_1 - P_{-1} \quad P_1, P_{-1} \text{ は projection}$$

(1) の条件より、 $1 = P_1 + P_{-1}$  の分解に対して

$$F \sim \begin{pmatrix} 0 & P \\ Q & 0 \end{pmatrix} \sim \begin{pmatrix} 0 & P \\ P^* & 0 \end{pmatrix} \quad (3) \text{ §1)}$$

$$(2) \text{ より } \quad 1 - P^*P \sim 0, \quad 1 - PP^* \sim 0$$

$P$  は広義フレドホルム作用素 ( $P_{-1}$  から  $P_1$  への) となる。

$$P \xleftrightarrow{1:1} F$$

次に  $p=1, q=0$  のとき  $C_{2,0} = M_2$  更に、生成元が

$$e_0 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}, \quad e_1 = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \text{ §1) }、 \text{ 条件式から}$$

$$F = \begin{pmatrix} 0 & iP \\ iP & 0 \end{pmatrix} \quad P^2 - 1 = P^* - P = 0 \quad [\varphi(a), F] \sim 0 \quad \forall a \in A$$

$$E = \frac{P+1}{2} \quad \text{で} \quad [\varphi(a), E] \sim 0$$

つまり、表現  $\varphi$  と  $K \otimes B$  を法として可換な射影子  $E$  とみる  
ことができる。

以上で定義より、代表元  $(\varphi, F)$  はどのような形になるかを演  
繹してきたが、実際、あつかう元は上の形よりさらに簡単な  
ものである。以下、それをかく。

$n \in \mathbb{N}$  に対し  $\mathbb{Z}$ .

$$\varphi_0: A \rightarrow M_n(B) \text{ } * \text{-homo} \quad \varphi_1: A \rightarrow M_n(B) \text{ } * \text{-homo.}$$

が与えられたとき.

$$\varphi(a \otimes e_0^n) \stackrel{\text{def}}{=} \begin{pmatrix} \varphi_0(a) & 0 \\ 0 & (-1)^n \varphi_1(a) \end{pmatrix}, \quad F = 0$$

$$(\varphi, 0) \in \mathcal{E}_{0,0}(A, B)$$

ここで、注意するのは、 $\varphi_i (i=0,1)$  が degenerate してもし  
いてこそで、もし  $A = \mathbb{C}$  のとき、 $[\varphi_0(1)] - [\varphi_1(1)] \in K_0(B)$   
となる元に対応する。

$K_0 K(\mathbb{C}, \mathbb{C}) = \mathbb{Z}$  の 1 に対応する元の構成は

$$\varphi(z) = \begin{pmatrix} z & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \varphi(e_0) = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}, \quad F = 0.$$

$c_1 = [(\varphi, F)]$  が生成元である。

## 2. Intersection Product.

$KK$ -群の間の同型問題や新しい元の構成などに利用される  
pairing がある。Intersection product が Kasparov [ ] に  
て定義された。

$$K_p K(A_1, B_1 \otimes D) \otimes_D K_q K(D \otimes A_2, B_2)$$

$$\longrightarrow K_{p+q} K(A_1 \otimes A_2, B_1 \otimes B_2)$$

( $\otimes$  は spacial tensor product. 注,  $C^*$ -環の tensor product  
はたかえん存在する。)

$D = \mathbb{C}$  のとき、tensor product であり、

$B_1 = A_2 = \mathbb{C}$  のとき、合成である積である。

定義から述べればよいが、非常に複雑で元の形を作るまでに長いから、詳細は Kasparov [4] を見てもううことにし、ここでは、重要な性質を挙げておく。

$$1) (\alpha \otimes_D \gamma) \otimes_E \mathbb{K} = \alpha \otimes_D (\gamma \otimes_E \mathbb{K}) \quad (\text{associative law})$$

$$2) \alpha \otimes \mathbb{C}_1 = \mathbb{C}_1 \otimes \alpha = \alpha$$

$f: A_1 \rightarrow A_2$   $g: B_1 \rightarrow B_2$   $*$ -homo. に對して

$$f^*: K_*K(A_2, B_1) \rightarrow K_*K(A_1, B_1)$$

$$[(\varphi, F)] \mapsto [(\varphi \circ f, F)]$$

$$g_*: K_*K(A_1, B_1) \rightarrow K_*K(A_1, B_2)$$

$$[(\varphi, F)] \mapsto [(g_* \circ \varphi, g_*(F))]$$

( $\because$   $g_*$  は  $g$  より誘導される  $\mathcal{M}(B_1 \otimes K) \xrightarrow{g_*} \mathcal{M}(B_2 \otimes K)$ .)

$h: D \rightarrow D_1$  に對して、

$$3) h_*(x) \otimes_{D_1} \gamma = x \otimes_D h^*(\gamma)$$

$$4) K_0K(A_1, A_2) \ni \left[ \left( \begin{pmatrix} f & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, 0 \right) \right] = \gamma_f \text{ と考えると}$$

$$\gamma_f \otimes_{A_2} \alpha = f^*(x)$$

$$K_0K(B_1, B_2) \ni \left[ \left( \begin{pmatrix} g & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, 0 \right) \right] = \delta_g \text{ と考えると}$$

$$x \otimes_{B_1} \delta_g = g_*(x).$$

最も重要なのは次の主張である。

$\alpha \in KK(D, E)$ ,  $\beta \in KK(E, D)$  があつて

$$\alpha \otimes_E \beta = \left[ \left( \begin{pmatrix} \text{id}_D & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, 0 \right) \right] \quad \beta \otimes_D \alpha = \left[ \left( \begin{pmatrix} \text{id}_E & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, 0 \right) \right]$$

となるとき.

$$6^\circ) \quad \otimes_D \alpha : KK(A, B \otimes D) \rightarrow KK(A, B \otimes E) \quad \text{isomorphism}$$

$$\otimes_E \beta : KK(A, B \otimes E) \rightarrow KK(A, B \otimes D) \quad "$$

$$\beta \otimes_D : KK(A \otimes D, B) \rightarrow KK(A \otimes E, B) \quad "$$

$$\alpha \otimes_E : KK(A \otimes E, B) \rightarrow KK(A \otimes D, B) \quad "$$

又、 $\alpha \in KK(D \otimes E, \mathbb{C})$ ,  $\beta \in KK(\mathbb{C}, D \otimes E)$  があつて.

$$\beta \otimes_D \alpha = \left[ \left( \begin{pmatrix} \text{id}_E & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, 0 \right) \right], \quad \alpha \otimes_E \beta = \left[ \left( \begin{pmatrix} \text{id}_D & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, 0 \right) \right]$$

となるとき.

$$7^\circ) \quad \beta \otimes_D : KK(A \otimes D, B) \rightarrow KK(A, B \otimes E) \quad \text{isomorphism}$$

$$\beta \otimes_E : KK(A \otimes E, B) \rightarrow KK(A, B \otimes D) \quad "$$

$$\otimes_D \alpha : KK(A, B \otimes D) \rightarrow KK(A \otimes E, B) \quad "$$

$$\otimes_E \alpha : KK(A, B \otimes E) \rightarrow KK(A \otimes D, B) \quad "$$

この一般的な存積を便して、一つの結果ではあるが、次の定理が従う。

定理 4 (Bott の周期性)

$$K_i K(A, B) \cong K_{i+n} K(A(\mathbb{R}^n), B) \cong K_{i-n} K(A, B(\mathbb{R}^n))$$

$\therefore$ ) Kasparov's canonical generators.

$$\exists K_n K(\mathbb{C}_0(\mathbb{R}^n), \mathbb{C}) \ni \alpha \quad K_{-n} K(\mathbb{C}, \mathbb{C}_f(\mathbb{R}^n)) \ni \beta$$

$$\text{s.t.} \quad \alpha \otimes_{\mathbb{C}} \beta = \left[ \left( \begin{pmatrix} \text{id}_{\mathbb{C}_0(\mathbb{R}^n)} & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, 0 \right) \right], \quad \beta \otimes_{\mathbb{C}_0(\mathbb{R}^n)} \alpha = c_1$$

q.e.d.

$A$ : nuclear  $C^*$ -環と仮定すれば、

$$(i.e., \forall 0 \rightarrow J \rightarrow E \rightarrow A \rightarrow 0 \text{ (exact)} \exists 0 \rightarrow J \otimes K \rightarrow E' \rightarrow A \rightarrow 0 \text{ (exact)})$$

$$s.t. 0 \rightarrow J \otimes K \rightarrow E \oplus_A E' + J \otimes K \rightarrow A \rightarrow 0 \text{ (split exact)}$$

これは、本当の定義とは異なるが、同値命題である。

このとき、 $K_1K(A, B) \cong \text{Ext}(A, B)$ 。この  $\text{Ext}$  の定義は以

下である。

$$\mathcal{E} = \{ 0 \rightarrow B \otimes K \rightarrow E \rightarrow A \rightarrow 0 \text{ (exact)} \}$$

この上は、 $E$  の  $C^*$ -同型で同値を入れ、

$$0 \rightarrow B \otimes K \rightarrow E \rightarrow A \rightarrow 0, \quad 0 \rightarrow B \otimes K \rightarrow E' \rightarrow A \rightarrow 0 \quad \text{に對し、}$$

$$\text{和 } \mathcal{E}. \quad 0 \rightarrow B \otimes K \otimes M_2 \rightarrow E \oplus_A E' + B \otimes K \otimes M_2 \rightarrow A \rightarrow 0 \quad \text{を導入}$$

して、

$$\mathcal{D} = \{ 0 \rightarrow B \otimes K \rightarrow D \rightarrow A \rightarrow 0 \text{ split exact} \}$$

で割った群を  $\text{Ext}(A, B)$  と書き、拡大の群と呼ぶ。

この拡大の群の性質を便、2. Kasparov は次の定理を得る。

定理 5.  $A$ : nuclear  $A \triangleright I, B \triangleright J$ ; ideals

次の exact sequences を得る。

$$\begin{aligned} \cdots \rightarrow KK(A/I, B) \rightarrow KK(A, B) \rightarrow KK(I, B) \xrightarrow{\delta} KK(A/I, B) \rightarrow KK(A, B) \rightarrow KK(I, B) \rightarrow \\ \cdots \rightarrow KK(A, J) \rightarrow KK(A, B) \rightarrow KK(A, B/J) \xrightarrow{\delta'} KK(A, J) \rightarrow KK(A, B) \rightarrow KK(A, B/J) \rightarrow \end{aligned}$$

定理 6 d)

$$KK(A, B_1 \oplus B_2) \cong KK(A, B_1) \oplus KK(A, B_2)$$

$$KK(A_1 \oplus A_2, B) \cong KK(A_1, B) \oplus KK(A_2, B)$$

b)  $A_i$ : nuclear  $A = \bigoplus A_i$  Co-direct sum

$$KK(A, B) \cong \prod KK(A_i, B) \quad (\text{直積})$$

注意. 位相空間の K-理論 との関係.

$X, Y$ ; 可分局所コンパクト Hausdorff 空間.

さらに,  $X^+, Y^+$  が CW-complex. のとき

$$\begin{aligned} K_0 K(A, B) &\cong \varinjlim_n \pi_{n+i}(X^+ \wedge \mathcal{F}_n(Y^+)) \\ &\cong \varinjlim_n \pi_{n+i}((X^+ \wedge \mathcal{F}_n)(Y^+)) \\ &= \varinjlim_n [S^{n+i} Y^+, X^+ \wedge \mathcal{F}_n] \end{aligned}$$

注意. Kasparov の原論文では, コンパクト群  $G$  が  $A, B, K$  上作用して,  $KK^G$ -群 を考えている.  $(\varphi, F)$  に次の条件を附加する.

$\varphi$ :  $G$ -equivalent.

$$\text{i.e. } \forall g \in G, a \in A \quad g \varphi(a) = \varphi(g \cdot a)$$

$F$ :  $G$ -invariant operator. i.e.  $\forall g \in G \quad gF = F$

このとき,

$$K_0 K^G(\mathbb{C}, \mathbb{C}) = R(G) \quad (\text{表現環}) \quad K_1 K^G(\mathbb{C}, \mathbb{C}) = 0$$

$KK^G(A, B)$  と  $KK(A \rtimes G, B \rtimes G)$  の関係は、は、きりわかっていない。ただ、前者から後者への準同型がある。  $G$  が非コンパクトの場合も定義されているが、この方は準備が行きとどかず論文をあげておく。

## REFERENCE

- [1] Brown-Douglas-Fillmore; Unitary equivalence modulo the compact operators and extensions of  $C^*$ -algebras, Lec. Not. in Math. No.345.
- [2] \_\_\_\_\_; Extensions of  $C^*$ -algebras and K-homology, Ann. of Math. (2) 105 (1977), 265-324.
- [3] Connes; Non-commutative differential geometry, Chap.I: The Chern character in K homology. Chap.II: De Rham homology and non-commutative algebra. to appear.
- [4] Kasparov; The operator K-functor and extensions of  $C^*$ -algebras. Izv. Akad. Nauk SSSR, Ser. Math. 44(1980).
- [5] \_\_\_\_\_; K-theory, group  $C^*$ -algebras, and higher signatures, to appear.